

杜國清編 李賀資料目錄

1979.2.6

一九七六年八月二十五日一〇・〇〇、杜國清氏が拙宅を過訪され、約一時間閑談して去られた。
一九七七年二月十四日、同月八日付十日消印の氏からの航空便を、受取った。

さて、私の手許にある資料で「李賀研究」の一李賀文献目錄稿(一)(二)(三)に記載されていないものをリストにしてお送りいたします。

とあって、便箋七枚のリスト、また

追伸 史榮李長吉歌詩補註に關する資料を参考まで同封でお送りします。

と、『文瀾學報』第二卷第三、四期(民國26年¹⁹³⁷6月出版)の二三五頁のコピーが、同封されていた。

たいへんうれしく、さう早く『李賀研究』の読者にこの喜びを分ちたいと思ったのに、その発行が遅れて今日に至った。怠慢をおわじし、改めて感謝の意をここに表わしたい。

氏について『当代文芸作家名録(国立中央図書館目錄叢刊第六輯 一九七〇)』には、

Tu Kuo Ching 杜國清 M. b. July 19, 1941 Taichung Hsien, Taiwan 台灣台中縣人 Add.: 99, Shui

Yuan Rd., Feng Yuan Chen, Taichung Hsien 台中縣豐原鎮水源路99號 蛙鳴集(詩集)現代文學雜

誌社 1963 島興湖(詩集)笠詩社 1965

と記し、過訪されたときもらった名刺には「美國加州大學東方語文學系助教授」の肩書がみえる。

リストはすべて横書だが、ここでは欧文以外はすべて書きに改める。

- 1 校訂昌谷集餘談 田北朔 國粹學報叢談 43 期 1908
- ② 蒙古刊李賀歌詩編跋 王國維 觀堂別集卷三
- ③ 中國韻文裡頭所表現的情感 梁啟超 飲冰室文集之三十七 1936 上海中華書局
- 4 讀李賀詩雜記 戴望舒 小說戲曲論集 北京作家出版社 1958
- 5 李長吉詩研究 姚以 宇宙風乙刊 45・46 期 上海 1941
- 6 韓愈志 韓門弟子記第五 錢基博 上海商務印書館 1935
- 7 象牙塔到白玉樓 余光中 文星 13 卷 5 期 (1967) 台北 1964
- 8 論「象外象・景外景」兼談晚唐二李詩 陳曉雷 現代學苑 1 卷 9 期 台北 1964
- 9 李賀研究 友梅 書目季刊 2 卷 3 期 台北 1965
- 10 李長吉年譜 唐錫祿 幼獅學誌 7 卷 2 期 台北 1965
- 11 兩唐書李賀傳考辨 蔡慶炳 漢江學報第七期 1968
- 12 說李賀馬詩二十三首 蔡慶炳 舊知人 第 113 期 台北 1967
- 13 鬼才詩人——李賀 陳尚存 文海傳奇 (國語日報副刊) 志全出版社 台北 1966
- 14 李長吉詩的再認識與再評價 楊鍾基 1970 年 3 月 京都大學勝土論文
- 15 唯美主義啓示者李賀 蘇雪林 舊詩概論 台灣商務 1970 台一版
- 16 李長吉歌詩源流掣隅 上下 朱君愷 東方雜誌 5 卷 14・12 期 台北 1972

- 17 李賀——悲劇型的人物 費海璇 反攻 第368期 台北 1972
- 18 李賀詩欣賞 賈永武 詩心 三民書局 台北 1971
- 19 鬼才詩人李賀 張傑水編著 文壇舊事 落花生出版社 台北 1971
- 20 李賀的生平及其詩 鄭騫 景午叢編 上編 中華書局 台北 1972
- 21 詞與李賀詞 張庚康 中華詩學 8卷5期 台北 1973
- 22 詩鬼——李賀 菊韻 今日中國 34期 台北 1974
- 23 李賀歌詩的意象與造境 中晚唐三家詩析論 方瑜 牧童文史叢書5 牧童出版社 台北 1975
- 24 唐代青年奇才詩人李賀 劉中赫 文藝 72期 台北 1975
- 25 仙品與鬼才 庚生 國魂 361期 台北 1975
- 26 法家詩人李賀 言兵 香港大公報 1975年12月24日
- 27 唐代革新派詩人李賀 宋際勳 香港大公報 1975年12月16日
- 28 李賀詩的象徵結構試探 蔡英俊 中外文學 4卷7期 台北 1975
- 29 關於李賀「協律鉤元」 謝國楨 香港大公報 1976年5月5日
- 30 書評 唐李賀協律鉤元 莊申 東方文化 香港中文大學 1976
- 31 國際漢學與李賀研究 莊申 書目季刊 台北 1976
- 32 李賀詩歌散論 姚克 明報月刊 10卷10期（No. 118） 香港 1975
- 33 論李賀詩之難譯 姚克 明報月刊 11卷4期（No. 124） 香港 1976
- 34 如「啼眼」之一「類眼」——李賀「蘇小小墓」詩另一解 水晶 聯合報 台北 1976年7月19日

- 35 李賀與清逸 劉滄浪 幼獅月刊 43卷6期(16.282) 台北 1976
- 36 釋詩不可太高深 黃況 明報月刊 11卷9期(16.129) 香港 1976
- 37 佛洛德森的英譯「李長吉歌詩」 周誠真 幼獅文藝 219期 台北 1972
- 38 談怎樣重估李賀詩 周誠真 幼獅月刊 44卷3期(285) 台北 1976
- 39 李賀與比較新的批評方法 周誠真 幼獅月刊 44卷1期(283) 台北 1976
- 40 與姚克先生論李賀詩 周誠真 明報月刊 11卷7期(127) 香港 1976
- 41 李賀詩 周誠真 明報月刊 10卷11期(119) 香港 1975
- 42 李長吉詩 梁簡能 聯大文學 香港聯合書院 1958
- 43 李賀是革新派？法家詩人？唯物論者？ 周自強 匪情月報 19卷4期 台北 1976
- 44 李賀歌詩評釋(一) 杜國清 笠詩刊 51期 台北 1974年2月
- 45 李賀歌詩評釋(二) 杜國清 笠詩刊 60期 台北 1974年4月
- 46 李賀歌詩評釋(三) 杜國清 笠詩刊 61期 台北 1974年6月
- 47 李賀歌詩評釋(四) 杜國清 笠詩刊 62期 台北 1974年8月
- 48 李賀詩中的超現實意象 王津平譯 幼獅文藝 233期 台北 1973
- 49 新編唐詩三百首 中華書局編 北京 1958
- 50 唐詩一百首 中華書局上海編輯所編輯 1959

「李賀文獻目錄稿(一)(二)(三)」記載されなかつた日文資料

- 幽明―李賀の作品の特異性について 1 齋藤 暁 俳句研究 34 卷 3 号
 凄冷艶美―李賀の作品の特異性について 2 齋藤 暁 俳句研究 34 卷 5 号
 全唐詩にあらわれたる「死」字と李賀詩 上尾 龍介 東方学 35 28
 李賀雑論―李賀の意識世界 瀬戸 保男 集刊東洋学 16 166
 李賀と新題の集府―特に古集府との関連において 高木 重俊 函館大学論究 8 73・9
 李賀について 戸立 一郎 集刊東洋学 32 74・10
 李賀小考―夢からのアフローチ 戸立 一郎 集刊東洋学 34 75・11
 李賀の詩と日本文学 小川 環樹 風と雲 東京 1972

英語による博士論文

1. Chen, David Ying "Li Ho and Keats: A Comparative Study of Two Poets" Indiana University, Bloomington 1962
2. South, Margaret T. "Li Ho: A Scholar-official of the Yuan-ho Period (806-821)" Australian National University, 1965
3. Robertson, Maureen A. "Poetic Diction in the Works of Li Ho (891-917)", University of Washington, Seattle, 1970
4. Fish, Michael B. "Mythological Themes in the Poetry of Li Ho (781-817)", Indiana University,

Bloomington, 1973

- 5 Kuo-ching Tu "The Poetry of Li Ho (790-816): A Critical Study", Stanford University, Stanford, 1974

中文英文總目

- 1 Chen, David Ying "Li Ho and Meats: Poverty, Illness, Frustration and a Poetic Career", *Tsing Hua Journal of Chinese Studies*, New Series V, no. 1, July 1965.
- 2 Graham, A. C. "A New Translation of a Chinese Poet, Li Ho", *Bulletin of the School of Oriental and African Studies*, Vol. 34, 1971.
- 3 Ralleyblank, E. G. "The Rhyming Categories of Li Ho (791-817)", *Tsing Hua Journal of Chinese Studies*, New Series VII, No. 1, Taipei, August, 1968.
- 4 South, Margaret T. "Li Ho and the New Yueh-fu Movement", *Journal of the Oriental Society of Australia*, Vol. 4, No. 2, 1966
- 5 Yü, Kuang-Chung, "To the White Jade Palace: A Critical Study of Li Ho (791-817)", *Tamkang Journal*, No. 7, Taipei, Nov. 1968
- 6 Wells, Henry W. "Li Ho's Creative Genius", *Tamkang Review*, Vol. VI, No. 1, Apr. 1973
- 7 Chen, Yi-hsin, "Li Ho, a Poetic Genius", *Chinese Literature*, No. 12 (1963)

8. Fish, Michael B. "The Striving of Young Man at Twenty: Li Ho's Poem 'Wildly Singing'" Critical Essays on Chinese Literature, ed. by William H. Nienhauser, Jr., The Chinese University of Hong Kong, Apr. 1976
9. Schafer, Edwards H. "The Goddess Epiphanies at Li Ho" The Divine Woman Dragon Ladies and Rain Maidens in Tang Literature (Berkeley, Los Angeles and London, 1973)

五ノ三 龍鳳集

- Devon Günther, "Das Gedicht von Chang-kuh des Li Ho", Studia Sino-Altaica, Festschrift für Erich Haenisch (Wiesbaden, 1961)
- Herbert Franke "Eine umgangssprachliche Erzählung und ihre schriftsprachliche Vorlage", Edward Erkes in Memoriam (Leipzig, 1962)
- P. Eugen Feifel Geschichte der Chinesischen Literatur. (Peking, 1948)

五ノ三 龍鳳集

Yves Hervouet, "J. D. Frodsham: The Poems of Li Ho (791-817)", Tong Pao, Vol. LVIII, 1972.

秦王飲酒

1980.3.15-4.14

李賀の「秦王飲酒」は、北宋刊のいわゆる宣城本『歌詩編』では、第一巻の第四十一首（わたしの與えた作品番號一〇四一）で次の通り。

秦王飲酒

秦王騎虎遊八極
劍光照空天自碧
羲和敲日玻璃聲
劫灰飛盡古今平
龍頭瀉酒邀酒星
金槽琵琶夜枨枨
洞庭雨脚來吹笙
酒酣喝月使倒行
銀燭檣檣瑤殿明

秦王飲酒

秦王 虎に騎り 八極に遊ぶ
劍光 空を照し 天 自今碧なり
羲和 日を敲き 玻璃 聲あげぬ
劫灰 飛び盡して 古今 平なり
龍頭 酒を瀉ぎ 酒星を邀ふ
金槽の琵琶 夜 枨枨
洞庭の雨脚 来って笙を吹く
酒酣に 月を喝して 倒行せしむ
銀燭 檣檣 瑤殿 明なり

宮門掌事報一更

宮門の掌事 一更を報ず

花樓玉鳳聲嬌瘳

花樓の玉鳳 聲 嬌瘳

海綃紅文香淺清

海綃の紅文 香 淺清

黃鵠跳舞千年觥

黃鵠 跳舞す 千年の觥さかづき

仙人燭樹蠟煙輕

仙人燭樹 蠟煙 輕し

清琴醉眼淚泓泓

清琴 醉眼 淚 泓泓

題の「秦王飲酒」を宋蜀刊『李長吉文集』は「秦王飲」とし、朝鮮活字本『李長吉集』は「秦王飲酒歌」とする。第三句「瑤」字を宋蜀本等は「瑤」とする。第四句「古今平」を中華書局刊『文苑英華』は「今太平」とし「集に古今に作る」と注する。第六句「金槽」を宋蜀本は「金槽」とするが誤りであろう。第十一句「花樓」を朝鮮本は「花臺」とする。第十三句「黃鵠」を『文苑英華』は「黃娥」とし「集に鵠に作る」と注する。王琦『李長吉歌詩彙解』には「文苑に黃娥に作る」と注する。

韻字を『篇韻』に據って示せば、「極」は入聲二十四職、碧は入聲二十二咍。他はすべて下平聲で、「聲」「清」「輕」が十四清、「平」「笙」「行」「明」「更」「瘳」「觥」が十二庚、「聖」が十五青、「根」「泓」が十三耕。庚・耕・清は同用で、青は獨用だ。

毛澤東が陳毅にあてた一九六五年七月二十一日付の手紙が、雑誌『詩刊』一九七八年一月號に「毛主席給陳毅同志談詩的一封信」と題して發表され、同じ年の『文學評論』第一期にも轉載された。

李賀の詩はおおいに一讀に懽するが、きみには興味をも、てもらえるかどうか。

という言葉がみえる。毛氏の李賀愛好はつとに知られているが、この「談詩」の手紙で「詩はかならず形象思维を使用する」といい、李白・杜甫・韓愈とならべて李賀に言及したためか、以後形象思维と李賀に關する論文・記事が新聞・雑誌を賑わすようになった。賀に關する記事で「秦王飲酒」をとりあげるものが多いのも一奇とすべきだ。その大半は『光明日報』の広告などで知り得ただけで入手できず、詳細はわからぬが、『復旦學報』（社會科學版）一九八〇年第一期に載せる陳允吉「李賀へ秦王飲酒の辨析——兼與胡念貽同志商榷」は、先んずる諸論文を批判しつつ自説を展開している。これによつて「秦王飲酒」についての現在の中國論壇の意見の大體を察することができよう。簡約して紹介する。

陳論文は二部に分かれ、その一は「詩中の秦王は果して誰か」、その二は「秦王飲酒」の主題は何か」。まず一。

秦王の解釋に三説あつて、一は秦の始皇とし、二は唐の徳宗とし、三は唐の太宗とする。

一説をとるものは、宋の呉正子の「李長吉歌詩箋注」、明の徐渭の「李長吉集注」、曾益の「昌谷集注」、中國社會科學院文學研究所編「唐詩選」（一九七八年・北京）

二説をとるものは、清の姚文燮の『昌谷集注』、王琦の『李長吉歌詩彙解』、葉葱奇の『李賀詩集』(一九五九年・北京)

三説をとるものは、胡念貽の「秦王」辨(『光明日報』一九七七年八月十三日)、陳遵等の「文藝史の偽造と四人組」の反革命陰謀(『鍾山』文藝叢刊・一九七八年第二期)

このほか、蔣凡等の「重補造化奪天工」(『文藝論叢』一九七八年第三期)は、「この詩が唐の太宗を歌頌するものか、唐の徳宗を諷刺するものかの問題は討論すべきだが、秦の始皇と關らぬことだけは確かだ」という。陳論文は、舊注すなわち一の始皇説に「比較同意」する、として次の四點を指摘する。

(一) 詩歌の題目から見て

「秦王飲酒」は樂府體の詩で、古樂府「秦王卷衣」を繼承する。「秦王卷衣」は「樂府古題要解」のいうように、咸陽の春景と宮闕の美を言い、秦王が衣を卷いて愛人に贈ったもの。秦の始皇を寫したことに毫も疑いない。「秦王飲酒」も、宮宴景色の盛を描くに力點をおいたもので、兩者の中心人物は同一人。すなわち、秦王は始皇とするのが最も合理的な推斷だ。

(二) 詩歌冒頭の兩句から見て

秦王騎虎游八極、劍光照空天自碧を、ちかごろ一般に「秦王」の武力による天下統一ととるが、そうではなく、始皇が中國統一後に四方を巡遊した史實を指す。東北は碣石、東は之罘、東南は會稽、南は衡山、南郡、西北は隴西、北地に至り、石刻中に「親巡遠方黎民……周覽東極、(泰山石刻)、皇帝春游……逮于海隅、(之罘石刻)、親巡天下、周覽遠方、(會稽石刻)」など

の文字が見え、時虎游八極にびったりで、その秦王の始皇たることを証明する。

(三) 詩中の「飲酒」に關わる描寫から見て

近年かなりの人がこの飲酒を、成功を慶賀する宴會と説く。だが、夜間の深宮中のことで、秦王以外に、侍する者は宮女と仙人だけ、功臣貴戚が参加せねば、豪華ではあつても盛大に成功を慶賀する宴會とはいへぬ。始皇は六國統一後、佚樂に耽り、宮殿を修飾し仙道を求めたので「秦王飲酒」の描寫に相應する。唐の徳宗は、宴游を好むといわれるが庸弱で、詩中の豪縱な氣魄にふさわしくない。唐の太宗は、史家に賢明な君主とよばれ、『舊唐書』貞觀元年十二月壬午、秦の始皇や漢の武帝の求仙を批判している。晩年、思想が變化し、胡僧那羅迦婆娑寐の長生藥を服食したために死んだが、かれの主要な方面ではなく、それにこういう事情は唐代の統治階級がひたすら隠さうとしたこと。李賀は皇室の子孫で、胡説のように太宗を非常に崇敬していたのなら、長夜の酣飲をその太宗にかずけることがあろうか。

(四) 秦王、呼びかたから見

胡説によれば、李賀集中、秦の始皇に言及するのは「白虎行」「苦畫短」「官街鼓」の三首。「白虎行」は偽作の疑いがあるのでおいておくと、「苦畫短」では嬴政と氏名で呼び、「官街鼓」では、秦皇と呼ぶ。だから李賀は始皇を「秦皇」と呼ぶので、秦王ではなく、文字使用の習慣からも偶然ではない由。だが偽作としたところで「白虎行」はその一例ではないか。李白は「古風」で、秦王掃六合、とも、秦皇按寶劍、ともうたう。漢の電誼の「過秦論」、唐の陳子昂の「燕太子」、岑參の「終南雲際精舍尋法燈上人不遇」等に始皇を「秦王」と呼んでいる。

以上を綜合して「秦王飲酒」の秦王は秦の始皇であつて唐の徳宗でも太宗でもない。つきに二。

「秦王飲酒」の主題は何か。

姚文燮は唐の徳宗の飲酒享樂を諷刺するものとし、四人組時代には、秦の始皇の中國統一事業に對する頌歌で法家思想の表現としたが、いずれも根據に乏しい。

「秦王飲酒」の主題は、頌歌でもなく、諷刺でもなく、美刺褒貶の政治的意義を含まない別圖の一種の思想感情を寄托したものだ。この詩は古代の游仙詩や宮體詩から大きな影響をうけて、それらがしばしば人生の短促に對する感慨を主要内容とするように、李賀の作も、錢鍾書『詩錄』にいわれる「世變無涯、人生有盡」への詠嘆だ。一首の大意は、秦の始皇が天下を統一し、その勢で時間をも超越しようとし、酒宴によつて神仙境の氣分を彷彿しようとするが、燭の煙がけらぎ消えれば夜は暁となり、時は人を待たず、長命は期し難く、秦の苦痛は倍增し、宴に侍る仙妓が同情して涙を流す。

三

「秦王」に唐の太宗をあてるのは新説だが、胡氏らより早く、一九七四年十月に森賴壽三「李賀『秦王飲酒』をめぐって——李長吉體と杜詩——」（八天教授等退休記念論文集）が發表され

ている。

「秦王」につき、秦の始皇、唐の僖宗と見る舊注のほか、特定の人物に當てはめる要はないとする鈴木虎雄・荒井健説を掲げた後、つぎのようにいう。

一見些末な字句穿鑿問題のように思える「秦王」の比定は、しかしながら、少なくとも李賀の詩の根本に関わる事情を含んでいる。結論から先に言えば二詩（原田注：「秦王飲酒」と「長歌續短歌」）に見える「秦王」は、いずれも唐創業の王、太宗李世民を比定する以外考えようはない。

その理由として、太宗が皇太子となる前に秦王に封ぜられたこと、「長歌續短歌」の「秦王不可見、旦夕成内熱」が杜甫「折檻行」の「嗚呼房魏不得見、秦王學士時難兼」に基づき、杜の秦王が太宗だから、李賀のも、唐人は始皇を指すには「秦皇」の語を用いるのが常で、少なくとも杜甫と李賀の他の詩において混同は皆無である。

そうして「秦王飲酒」は、

詩人にとって「聖なるもの（Das Heilige）」としての太宗——「八極を盼めて以て騰く翫び九天に臨みて高く峙す」（太宗「鳳賦」）と詠った創業の王に對する、いわば、悲しき頌歌である、……「太宗」の語を用いながったのも、李賀が李世民を歴史上の人物として「世俗（Das Profane）」の次元で描くことを潔しとせず、より象徴的表現を可能ならしめる「秦王」の語を選んだものと解することができる。

氏はここで太宗から離れ、李賀のこの詩に感められたもうひとりの「聖なるもの」として杜甫

を挙げ、「壯遊」の「飲酣視八極」や「同諸公登慈恩寺塔」の「羲和鞭白日」が「秦王飲酒」に先行するものとし、「慈恩寺塔」と「秦王飲酒」は

絶望的な天地崩壊の感覚を内包しつつ、創業の王の姿を祕かに希求するという古代人的な信仰告白の表出を共通した性格としてもつ一方、『秦王飲酒』に着目すれば、そこには杜詩における聖王の現實世界内での存在感はなく、……幻想世界に描き出された太宗の姿である。この現實（世俗）的存在感の脱落している點が重要で、杜甫が……基本的には儒家的な經世の志を最後まで捨てず、従って彼の絶望も主としてその面から來るのに對して、……李賀の倨傲は、裏面において、儒家的秩序も含めて現實（世俗）的存在の一切に對する根柢からの懷疑と背中合せになっており、その意味でむしろ凡庸の絶望に近いものさえ見出せるのである。……『秦王飲酒』は、李賀にとつて、そこにこそ生くべき夢の世界であつたといえよう。と結ぶ。省略した部分にも創見が鑿められ、教えられるところが多いが、魯鈍なわたしにはかなり難解だった。同年十二月『李賀研究』第十號に『雜記・76』「劫灰飛盡」と題して小感を記した。本稿の四以下は「劫灰飛盡」（以下「前稿」と簡稱）を補充する意圖をもつ。

四

森瀨氏の「秦王」即唐太宗説は陳允吉の説によってその根據の幾分を失うだろう。だが陳氏の「秦王」即秦始皇説も確乎不動とはいいい難く、李賀の意識の深層に向ける森瀨氏の探針は、陳氏